

昭和20年(1945)年に4月満洲に渡り、8月に帰国

満洲移民・養豚場の実体

高知県須崎市浦ノ内 桶本 富子



聞き取り中の桶本富子さん

富子、私は昭和17年(1942)3月22日に高知県高岡郡高岡町東川久保に生まれました。昭和20年4月末に、3歳になったばかり、妹は生まれたばかりでした。突然、父の決断で満洲に渡りました。

満洲に行った理由は、この記事を書くまで、あまり考えたことはありませんでした。母が可愛がっていた弟が、海軍特別攻撃隊員として、亡くなった通知が4月20日に届き、母が非常に落胆したそうです。彼は18歳でした。「成績の優秀な子であった」と、母は、後年、よく言っていました。彼は航空隊予科練を志願しました。最後の帰省の時に、母は私をおぶって、現在の県立高岡高校へ見送りに行ったそうです。航空兵志願を募るために帰省したのかもしれませんが。東京の空襲が3

月にありました。父は高知市種崎のある大型船の造船会社に勤めていて、生活に困るようなことはなかったように思います。

いつか高知にも空襲があるだろう。母の落ち込んだ姿をみていて、満洲での生活を考えたと思ったのではと推察します。

両親を置いて、父、母、私、赤ん坊の妹の4人で、持ち物も少なく満洲に行きました。満洲の知人に連絡を取った話も聞いたことはありません。満洲で働く募集広告をみたのではないかと思います。父のこのような決断の速さは、いつもありました。

家族が辿り着いたのは、満洲東部方面のようであったと思いますが、場所は記憶がありません。平坦で広い畑がある農業地帯でした。しかし父は農業の経験もなく、満洲で鋤(くわ)を持って農地を耕している姿の記憶はありません。開拓団ではなかったと思います。日本人の長屋がいくつかあり、その一室に四人ですごしました。塀を隔てた庭先は通り道でした。日本人の長屋は共同トイレと共同風呂でした。私は、真っ黒い土で、ぐちゃぐちゃした道に行って、紙1枚を置き、大便をしなければなりません。すると、放し飼いの豚が走って食べに来るのです。恐ろしくて泣きました。便がよく出ませんでした。広い広場に、たくさんの豚が放し飼いでした。今、思うと豚を飼う養豚会社だったのではと思います。

「三歳で良く覚えているな！」と言われましたが、今もはっきりと、この時の光景が思い出されます。満人(中国人)の住まいは、豚がいる広場の向こう側に、同じように長屋になっておりました。私は、その長屋の満人達に興味がありました。大きな鉄釜を使い、細くした何かを炒めているのを眺めていたことをはっきりと覚えています。母は、「いつも満人部落の中に、ひとりで走って見に行った」と言いました。豚の解体をみました。日本長屋では、何人も並んで配給に豚肉をもらい、母が受け取ったことを覚えています。普通の弁当箱よりかなり大きい入れ物に、豚肉を入れてくれました。

父は、わずか40日間ほどの長屋生活で、生活状況が悪くて、長く居るのに堪えず、「ここにおつたらいかん。日本に帰ろう」と決断して、ある月の出ない夜に、一家でひそかに駅へ歩いて向いました。父は釜、鍋、水筒、少しの米、母は妹を背負い、持ち物もあまりありませんでした。父は帰国の費用は充分に持っていたそうです。途中、後から憲兵が大きな馬に乗って追いかけて来ました。満人が使う馬は小さくて、「ラバ」と云うそうです。駅に向かって歩いていると、突然、馬に乗った憲兵と会ってしまい、両親は恐ろしかったそうです。「夜逃げをしてまでも、そんなに、日本に帰りたいか!」と問われて、父は「日本に帰りたい!」と言ったそうです。憲兵は、暫くして、「見逃してやる。早く行きなさい」と言った。父は深々頭を下げると、憲兵は去って行ったそうです。父は「憲兵の情けで帰国できた」と、感謝していました。

私が50歳になった頃に、憲兵さんが私達家族を許して下さったことを言い残さねば思いました。。その頃は、中国残留孤児や開拓団のことが、新聞で報じられていました。父が憲兵さんへの感謝の想いなどを私に話し始めたのです。私はそれを文章にして高知新聞の小文ですが、「読者の広場」に、昭和62年(1987)4月27日号に、{父母の体験を語り継ぐ}というタイトルで投稿して掲載されました。両親は新聞を読んで、私の所に来ました。その時、父母に満洲での生活や日本に帰る道中を覚えていることを話したら、本当に驚いて、「どうしてそんなことまでを覚えちゃうろうか!」と、何度も問い返されました。父母は私が覚えていることを不思議がっていました。

養豚場の長屋を後にして、辿りついた満鉄の駅の情景を覚えていることを、50歳になるまで一度も父母に話すことはありませんでした。父母が私の記憶が、「すごい、どうして!」と連発して、満洲でのことを、両親と語り合いました。

夜逃げをして満鉄の駅に辿り着いた時です。日本に向かう汽車を待つのに、幾日間か、駅のなかに居ました。。私は水筒をさげて線路の脇にある水道蛇口の所に行き、水を何度も汲んで運んだことを、はっきりと覚えています。

朝鮮への記憶はないので、朝鮮を通らずに、満洲のどこかの港から帰国したように思いますが、どの港か、日本のどこの港に着いたか、両親から聞くこともありませんでした。

日本へ帰る船に乗る前に、父は日本軍の軍人に捕まり、「仕事がある!」と、連れられてゆきました。母は私と妹を連れて宿探しをしました。やっと宿の二階に落ち着いて、父が帰って来るのを待っていたそうです。父とは連絡を取り方法もないまま、過ぎてゆきました。私は、母の下駄の片方を二階の窓から、外へ落としてしまいました。ひとが入れない狭い隙間でした。そのために、母は日本の港に着くまで、下駄がないまま、裸足で歩いて船に乗ったそうです。

父は、軍の仕事が終わり、私達を探していたそうです。宿では、私が母に叱られて激しく泣いたので、母は、私を連れて外に出ようと階段を降りた時に、玄関を出ようとする父を母が見たそうです。宿の主人は宿帳をみせてくれず、「いない!」と言われて、玄関を出ようと思った瞬間に、母と目が合ったそうです。両親が再会したのです。この事は、私が50歳になって初耳でした。このことは覚えていませんでした。

帰国船を降り、鉄道で高知駅に降り立つまでが大変でした。ごった返す車内では、特に高松からの土讃線はトンネルが多くて、煙が車内に入ります。私が咳こむんでいたので、男の方が頻繁に窓を閉めて私を介抱してくれたそうです。土佐市新居の方だったそうです。動くのが充分でなく、病身でした。「帰国船内では、母が幾度も水を運んでやった」と、母は言いました。

列車は高知駅が終点でした。2日前に高知市に空襲があったそうです。多くの人達は、その先は線路道を歩いてゆきました。私達は伊野駅まで、枕木の上を歩いて行きました。

そこから、細い道を歩いて実家の東川久保に辿りつきました。私達を介護してくれた方は、病身で帰国して、暫くしてお亡くなりになりました。「人間は一人で生きられない。人様の真心に出会った時こそ、なにもの勝る幸せ」と、よく母は言っていました。

父は帰国して、すぐに新しい仕事を始めました。家の壁板枠を竹で編んで、その隙間に漆喰、藁、紙を混ぜて固めて板をつくりました。「テックス」と呼んでいました。この中に銀紙を入れるとキラキラして、飲み屋の壁にするテックスの注文がふえたそうです。最盛期の時には、50人以上の従業員がいたそうです、父の仕事が繁盛して生活は安定しました。しかし合板が出来るようになり、事業は縮小してゆきました。

満洲のことや帰国後のことを、もっと聞いておきたかったのですが、私が50歳で両親と満洲のことを語り合い始めた後、母は3年後に心臓病で亡くなり、父は10年後に逝去しました。

追記:

桶本富子さんは、「満洲の歴史を語り継ぐ高知の会」のイベント案内を高知新聞で読んで、満洲へ渡ったことを書き留めていた原稿を、私のところに送付された。原稿を拝見して、開拓団や専門の技術を生かすこともなく、家族で1945年終戦直前に、満洲に渡った記録であった。桶本さんの記述からも、1941年12月太平洋戦争が始まった頃からの日本の国内事情の一端が見えてきた。

当時は、日本国内では食料事情が悪く、終戦直前は、「一億総特攻」のスローガンが行き渡り、先が見えない時代であった。満洲は、「五族協和の楽土」と宣伝されていた。多くの日本人は満洲の方が、安全で住みやすいと思っていたのであろう。しかし、満洲の状況はそうではなかった。

桶本富子さんの原稿で、不明なところを私が富子さんに聞き取り、上記の原稿に加えしました。

2024. 9. 23 大野正夫記